



第66回国際学生会議
The 66th International Student Conference

事業報告書

総合テーマ
Global Citizens: Our Action, Our Future

グローバル市民～私たちの未来へ、今すべきこと～

目次

序章	2
実行委員長挨拶	3
団体理念	4
団体沿革	5
第1章 本年度開催概要	6
総合テーマ	7
第66回国際学生会議 開催概要	8
実行委員名簿	11
第2章 会議	14
One-Day ISC66	15
ISC Online Events Vol.1	18
ISC Online Events Vol.2	22
ISC Online Events Vol.3	26
ISC Online Events Vol.4	30
ISC Online Events Vol.5	34
終章	38
謝辞	39

序章

実行委員長挨拶
団体理念
団体沿革

実行委員長挨拶

国際学生会議とは、1954年に第一回を開催して以来、主催団体である日本国際学生協会の「世界平和達成への貢献」という理念の下、毎年夏の2週間、世界20ヶ国以上の学生が日本に集まり、寝食を共にしながら様々な議論や文化交流を行う団体です。

第66回目を迎えた今年の会議は、「グローバル市民～私たちの未来へ、今すべきこと～」を総合テーマとして掲げました。未だかつてないグローバル化に直面する今日、自分たちが生きていく将来を形作るのは、その未来を担う私たち学生だけです。世界中から集まる学生の知識と経験を合わせ、全員が協力しあいながら、世界の課題の解決策を考えていきたいと思い、このテーマを選びました。

また、本会議は、国籍、文化、習慣などの違いを知り、尊重する貴重な機会であると共に、互いの共通点を知る機会ともなります。こうした機会を通じて皆同じ人間であると実感することで、国際問題を他人事ではないという意識が生まれ、自ら行動を起こすことに繋がると信じて活動してきました。

今年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、通常通りの会議を開催することはできませんでした。実行委員全員で協議を重ねた結果、「今すべきこと」は参加者の健康や安全を守ることだと判断したためです。しかし、この時代だからこそ、ここで諦めずに実行委員の力を合わせて「今できること」を検討し、例年以上に世界中から多くの学生が参加できるようにオンラインでイベントを開催しました。初めての会議形態に戸惑いやチャレンジはありましたが、世界中の聡明な学生と議論をし、また文化交流によって親交を深められたことを大変嬉しく思います。

また、弊団体の活動は公的機関、企業、財団、そして個人の方々をはじめ、多くの方に支えられています。第66回国際学生会議の開催と成功にお力添えをいただいた全ての方々に心から感謝しております。

最後になりますが、国際学生会議が来年度、そしてそれ以降も国際社会に少しでも寄与できるものとなるよう、今後の発展を祈っています。

第66回国際学生会議 実行委員長 河畑波恵

団体理念

当団体の理念として、大きく分けて世界平和への貢献、学生の主体性の養成、多様性の尊重、社会への貢献の4点が挙げられます。

当団体の最大の目的は国際社会の繁栄と秩序の安定に寄与し、最終的に世界平和に貢献することです。平和は国際社会が長年追い求めてきた絶対的目標であり、社会の一員である個人個人が目標達成に向けて努力することが求められています。しかし、平和といっても一概に定義することは容易ではありません。紛争やあらゆる対立がない世界を実現するだけでは十分とは言えません。そこで私たちは、近年注目されている人間の安全保障という概念を重要視し、誰一人取り残されない社会こそが目指すべき世界平和であると設定します。そして、学生である我々が当事者意識を持ち、如何にして世界平和実現のために行動を起こしていくべきかを熟考します。

また、学生自身が主体的に物事を考え、行動に移す力を養うことは非常に大切です。自分たちの可能性に気づき、自分の身の回りや世界で起こっている問題に目を向けることで問題意識を高めることができ、創造的な発想や批判的な考察をする力を身につけることができます。当団体の取り組みの中でも、参加者がリーダーシップを発揮したり、自主的な判断をしたりできる機会を設定し、一人一人が主体性を養うことを促しています。感受性が豊かな学生という時期に培った自信と経験は、参加者にとって将来に繋がる大きな糧となることを信じています。

さらに、今日の国際的な環境において、多様性という要素は重要な概念です。世界中の多種多様な人々の交流において一人一人の個性や経験を尊重することは不可欠であり、多様性が受け入れられる社会の実現に尽力することは当団体の大きな使命の一つです。また、異なる文化や環境の中で生まれ育ち、多様な価値観を持つ学生たちの意見交換や交流は、参加者自身の知見と会議の議論の幅を広げる非常に意義の大きいものです。会議期間中の密度の濃い交流が、より多様な側面から考察された学術的成果を生み出すはずです。

忘れてはならないのが、一般社会において学生の立場と影響力はそこまで大きくないとはいえ、学生も社会の中で重要な存在であり、積極的な社会参加と社会貢献が求められているということです。学生の提言は未熟で野心的なものに止まるかもしれませんが、しかし、我々は社会的要因や国益等のしがらみに縛られない学生ならではの革新的な意見を大切に、実際の会議の成果を様々な形で社会に発信していきます。さらに、会議終了後にも会議で培った問題意識や探究心を継続させ、参加者自身がそれぞれの形で社会の原動力となっていくという自覚と責任を持つように呼びかけています。

団体沿革

- 1934年 第1回日米学生会議(国際学生会議の母体)
「世界の平和は太平洋の平和、太平洋の平和は日米間にあり、然してこの現実には若き日米学生の間においての率直な意見の交換、及び相互。理解の信頼を促進しなければならない」という提唱文の下、青山学院大学にて開催。
- 1941年 日米開戦により会議は開催されず。
- 1947年 第8回日米学生会議
戦争の反省を踏まえ、「各国の親善と正しい理解こそが国際平和達成への唯一の道である」という認識下、日本で開催。
- 1954年 第15回日米学生会議
アメリカで行われた会議を最後に日米学生会議は発展解消。
- 1954年 第1回国際学生会議
12カ国から84名の海外からの学生の参加。28日間にわたり、東京、関西、北海道、仙台で開催。
- 1962年 第9回国際学生会議
団体代表者会議を新たに設置。以後の会議の充実と参加団体間の強い結束を目指す。
- 1968年 学生運動の影響で日本国際学生協会の中央委員会が分裂。
- 1970年 第16回国際学生会議
国際学生会議の再開。
- 1991年 第37回国際学生会議
帯広市との協力により、市民の方との国際交流の体験を共にする。
- 2003年 SARSの大流行により、国際学生会議は開催されず。
- 2018年 第64回国際学生会議開催
史上最多23カ国から学生が参加。ファイナルフォーラムで国連開発計画駐日代表近藤哲生氏による基調講演。
- 2019年 第65回国際学生会議開催
ファイナルフォーラムで国連開発計画駐日代表近藤哲生氏による基調講演、国連教育科学文化機関アジア太平洋地域事務所長青柳茂氏によるクロージングスピーチ。
- 2020年 第66回国際学生会議
新型コロナウイルス感染症の拡大により、事前招集会及び本会議のプログラムを中止。初の試みとなる、全てオンラインでのイベントを開催。

第1章 本年度開催概要

総合テーマ

第66回国際学生会議 開催概要
実行委員名簿

総合テーマ

Global Citizens: Our Action, Our Future

グローバル市民 ～私たちの未来へ、今すべきこと～

第66回国際学生会議 (ISC66)では、社会的な変化を与えると予想されるグローバル化が進む現在、若者こそがグローバル市民として新しい未来に貢献する責任と力を持っていると信じています。「グローバル市民」というのは相対的な言葉であり、一つの決まった定義はありません。そこでISC66では、「グローバル市民を”Awareness, Action, Cooperation, Global, Sustainability, Empowerment”という6つの言葉で表すことにしました。現在、グローバル化の動き自体がテロリズムや人権の侵害、不平等など、多数の障害に直面しています。私たちは、グローバル市民とはこれらの問題を意識して、その解決に向けて行動を起こそうと考えている人材だと考えています。こうしたグローバル市民がISC66の参加者として世界各地からの学生と様々な国際問題について議論し、国境を越えて協力することで、持続可能な社会を実現するような変化をもたらすことにつながるはずです。さらに、ISC66での議論にとどまらず、自分の周りの仲間にも力を与えて、自分が持続可能な未来を築くことのできる人材であると意識させることも重要です。ISC66を通して、参加者全員が自らのことを未来に変化をもたらす力を持つ「グローバル市民」として胸を張れることを願っています。

昨年10月から実行委員を結成し、2020年8月の本会議開催に向け準備を進めて参りました。しかし今年初めに世界中で新型コロナウイルス感染症が拡大し始めたことで、想像もしていなかった形で「グローバル市民としてできること」が試されました。通常通りの本会議を日本で開催することはできませんでしたが、完全オンライン化という国際学生会議史上初めての方法で世界中の学生との交流を実現しました。たとえ同じ場所にいなかったとしても、熱い議論や対話が生まれ、多くの参加者に「議論が楽しかった」と言っていただくことができました。また、オンライン開催にしたことによって、通常であれば日本に来ることは難しい参加者にも気軽に参加していただくことができました。例年以上に様々な背景を持つ人に参加していただいたことで、国際学生会議が大切にしている「多様性」がさらに増したことも実感しました。

第66回国際学生会議 開催概要

英語表記	The 66th International Student Conference
主催	日本国際学生協会 The International Student Association of Japan
総合テーマ	Global Citizens: Our Action, Our Future グローバル市民～私たちの未来へ、今すべきこと～
日程・場所	One-Day ISC66 2020年5月24日 ISC Online Events 2020年6月28日,7月5日,7月12日,8月1日,8月15日 両イベントともオンラインにて開催
参加対象	One-Day ISC66 18歳以上の国内外の大学生が対象。本イベントは学術議論に重点をおいたため、英語による書類審査と面接審査を行い、英語でのディスカッション遂行能力やコミュニケーション能力をもとに参加者を決定。 ISC Online Events 18歳以上の国内外の高校生・大学生が対象。「参加したいと思った理由」、「初めて会った人と議論する際に気を付けること」などのエッセイをもとに書類選考。One-Day ISC66と異なり、英語力よりもモチベーションを重視し、初めて参加する人を優先。
参加者人数	One-Day ISC66 日本在住学生 15名 実行委員14名 海外在住学生 10名 実行委員3名 計 参加者25名 実行委員17名 ISC Online Events(全5回) 日本在住学生 21名 実行委員各回5～9名 海外在住学生 19名 実行委員各回1～2名 計 参加者40名
参加国	アメリカ合衆国、インド共和国、インドネシア共和国、英国、ガーナ共和国、ケニア共和国、タイ王国、大韓民国、チュニジア共和国、ナイジェリア連邦共和国、日本、パキスタン・イスラム共和国、フィリピン共和国、ベトナム社会主義共和国
使用言語	英語

内 容

One-Day ISC66

キラーロボット問題についてのワークショップ

国際NGO ヒューマン・ライツ・ウォッチ (Human Rights Watch) による講演

参加者のディスカッション

(対面での実施をしていた場合に「事前招集会」として国内在住者向けに5月に行う予定だったものをオンライン化)

ISC Online Events

以下のような「学術議論/文化交流企画」の2部構成で構成されるイベント

本会議で設置される予定だった分科会ごとにイベントを分け、各学術議論をテーブルチーフがリードする学術議論の部分と、ISCの醍醐味である文化交流をディスカッションやカジュアルな意見交換の部分とを実施。

日程	学術議論	文化交流企画
Vol.1 6月28日	Open Data During the Coronavirus Pandemic コロナ禍におけるオープンデータ	Intercultural Communication
Vol.2 7月5日	Climate Activism Through Mass Movements: Youth Fighting for the Future or Much Ado About Nothing? 大衆の運動による気候行動主義: 未来のため に戦うのか、空虚な行動に終始するの か?	Special Talents Playground
Vol.3 7月12日	Circular Economy: Cleaner Environment, Healthier Humans サーキュラーエコノミー: よりクリーンな環境と より健康な人間	Your Customs, My Customs, Our Customs
Vol.4 8月1日	Karoshi: Overworking in the Japanese Society 日本社会における過労	Your Customs, My Customs, Our Customs
Vol.5 8月15日	Surveillance Capitalism: Impacts on Commercial, Social and Political Futures 監視資本主義: これからの社会にもたらすも のとは	Cultural Playground

実行委員名簿

実行委員長	河畑波恵 (かわばたなみえ)	大阪大学 人間科学部3年
副実行委員長	尾野ひかり (おのひかり)	早稲田大学 政治経済学部 4年
学術	Kanlongtham Damrongsoontornchai (カンロンタム・ダムロンストーンシャイ)	早稲田大学 国際教養学部 4年
	Do Hoang Hiep (ドー・ホアン・ヒエップ)	静岡大学 情報学部4年
財務	山崎舞衣 (やまさきまい)	武庫川女子大学 文学部4 年
総務	小澤夏菜 (おざわかな)	上智大学 法学部2年
	Sulagna Banerjee (スラガナ・バネルジェ)	立命館アジア太平洋大学 アジア太平洋学部2年
渉外	田村奈央 (たむらなお)	東京都立大学 人文社会学部 2年
	小松正実 (こまつまさみ)	創価大学 法学部3年
広報	青木美奈モントヤ (あおきみな)	早稲田大学 国際教養学部 4年
カメラマン/広報	伊藤セン理恩 (いとうせんりおん)	立命館アジア太平洋大学 アジア太平洋学部2年
企画	小林由奈 (こばやしゆうな)	甲南大学 経済学部4年

	澤村華乃 (さわむらはなの)	創価大学 国際教養学部3年
テーブルチーフ	Ayu Puspita Ningrum (アユ・プスピタ・ニングル)	Universitas Airlangga, Faculty of Social and Political Sciences, Undergraduate Year 3
	Doan Dao Duy (ゾアン・ダオ・ズユイ)	立命館アジア太平洋大学 アジア太平洋学部3年
	Narjes Mahjoub (ナルジェス・マジュブ)	Ghent University, Faculty of Electromechanical Engineering, Master Year 1
	Yuri Kim (ユリ・キム)	Hasanuddin University, Faculty of Dentistry, Doctor of Dental Medicine, Clinical Clerkship Year 1
	Wasim Abbas (ワシム・アバス)	Quaid e Azam University Islamabad, American Studies, PhD Year 3
	Nguyen Pham Lam Phuong (グエン・ファム・ラン・フウオン)	Leiden University, Faculty of Humanities, Asian Studies, Research Master Year 1

日本国際学生協会 (I.S.A.) 中央役員		
会長	瀬川湧太	甲南大学文学部2年
事務局長	小倉未有	甲南大学経営学部2年
財務部長	横井優樹	大阪大学外国語学部3年
企画部長	井上幸大	大阪大学外国語学部3年
海外派遣部長	河原沙和	神戸女子学院大学文学部2年
広報部長	中村美奈	神戸女学院大学音楽学部3年

日本国際学生協会 (I.S.A.) 各支部長		
名古屋	五十嵐瑞記	南山大学経営学部3年
大阪	原田茉鈴	関西大学社会学部2年
京都	辻川愛	立命館大学理工学部3年
神戸	児玉祐葵	甲南大学理工学部3年
岡山	井ノ原和	岡山大学法学部2年
九州	平沼健伸	北九州市立大学外国語学部2年

第2章 会議

One-Day ISC66

ISC Online Events Vol.1

ISC Online Events Vol.2

ISC Online Events Vol.3

ISC Online Events Vol.4

ISC Online Events Vol.5

One-Day ISC66

日時

2020年5月24日 15:00-18:00 (日本時間)

参加人数

日本在住学生 15名 (実行委員14名)
海外在住学生 10名 (実行委員3名)
計参加者25名 実行委員17名

参加国

11か国 (アメリカ合衆国、イギリス、インド、インドネシア、ガーナ、中国、ドイツ、ナイジェリア、日本、ベトナム、フィリピン)

ゲストスピーカー

Human Rights Watch/Campaign to Stop Killer Robots 左元様
Campaign to Stop Killer Robots Dalma Biro (ダルマ・ビロ)様
Campaign to Stop Killer Robots Katona Illés László (カトナ・イレース・ラスロ)様

内容

キラーロボット問題についてのワークショップ

会議の事前課題として、参加者に対してゲストスピーカーの左様による講演動画と資料を共有しました。さらに参加者には、キラーロボット問題に関する質問項目を用意して事前リサーチをしてもらいました。

当日は5グループに分かれて議論をし、最後にグループの代表者が議論の結果を発表しました。グループ議論では、「自分の住む国あるいは出身国で、各アクターがキラーロボット問題に対しどのような姿勢をとっているか」「キラーロボットの導入への賛否」「学生としてキラーロボット問題に対してできること」について意見を交換しました。発表後は、それに対してゲストスピーカーからのフィードバックをいただいたり、質問をする中で、キラーロボット問題に対する専門家の意見や、学生としてできる活動についての知見を得ることができました。

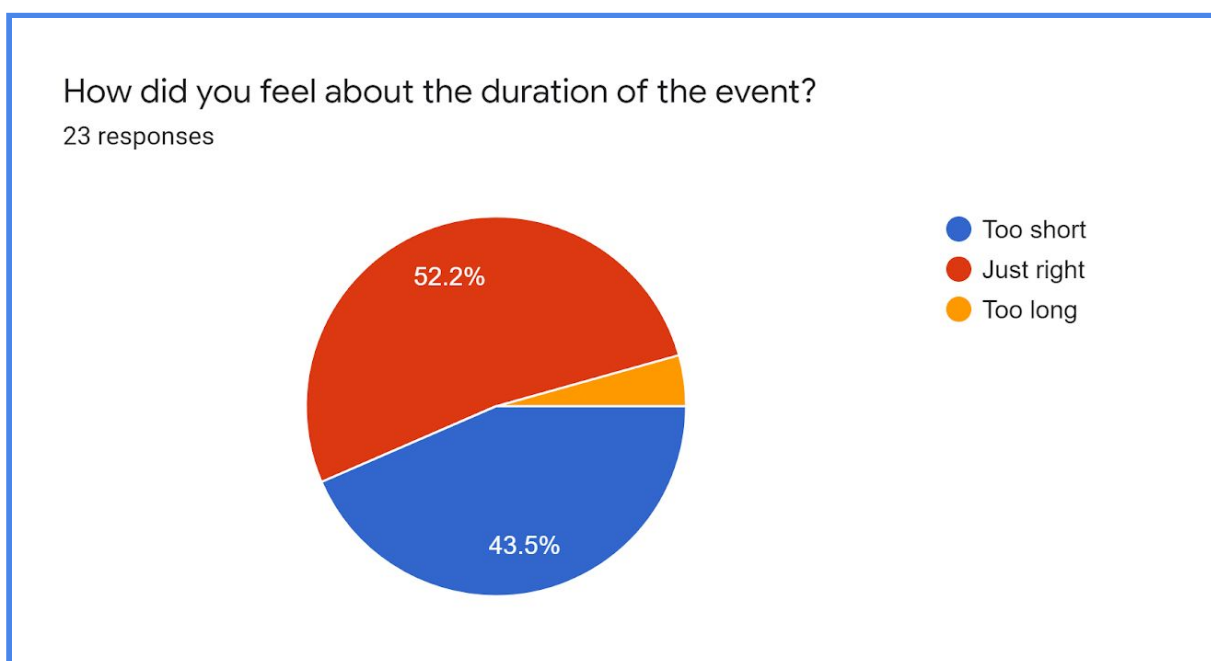
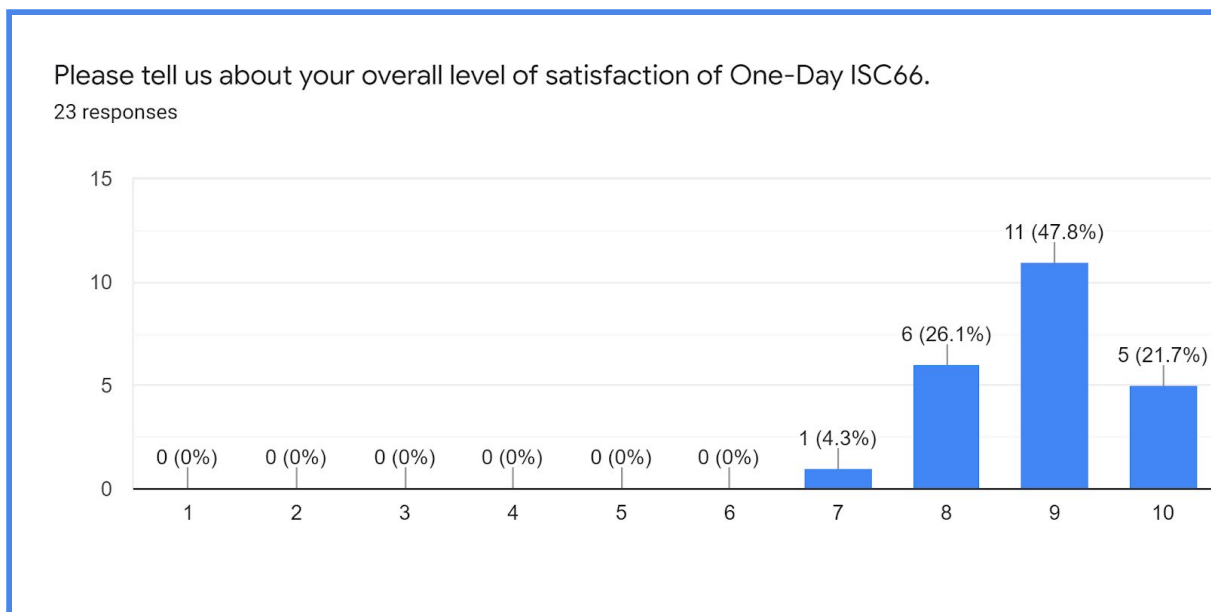
また、会議開催後には議論の内容をまとめ、左様に提出させていただきました。

結果

イベント後に実施したアンケートの結果、全体の満足度は概して高く、7割近くが9点・10点の評価をつけました。複雑なトピックに対して世界中の学生と意見を交換し合い、プロフェッショナルからの質疑応答が有意義だったという声が多数あがりました。

一方で、半数近くの回答者が「時間が短かった」ということを改善点としてあげ、次回以降のイベントでタイムスケジュールをより余裕をもったものにするべきだとの課題が残りました。さらに、オンラインイベントならではの接続トラブルもあり、実行委

員の臨機応変な対応や様々な状況を想定する必要性を感じた初回のイベントとなりました。



実行委員からのコメント

For a first time online discussion panel organized by the committee of ISC66, it was a success, as most of the participants could engage in fruitful discussions. Hopefully we can see some of those faces in the future ISC events! (General Affairs: Sulagna Banerjee)

(多くの参加者が積極的に参加し、充実した議論となりました。ISC66の初めてのオンラインイベントとして成功だといえると思います。今回の参加者がまた今後のイベントに応募してくれることを願っています。)



ISC Online Events Vol.1

日時

2020年6月28日 15:00-18:00 (日本時間)

参加人数

日本在住学生 6名 (実行委員9名)
海外在住学生 2名 (実行委員1名)
計参加者8名 実行委員10名

参加国

7か国(アメリカ合衆国、インド、インドネシア、タイ、日本、フィリピン、ベトナム)

内容

1. 学術議論 Open Data During the Coronavirus Pandemic
(コロナ禍におけるオープンデータ)
2. 文化交流 Intercultural Communication

1. 学術議論では、テーブルチーフによるプレゼンテーションで基本的な用語(datum, data, big data, open data)の意味とそれぞれの違い、そしてオープンデータを利用した新型コロナウイルス感染症対策を行っている国のケーススタディを紹介しました。会議前に同様の内容をまとめた資料を参加者に配布していたため、参加者の理解をより深めることができました。

そして、2つのグループに分かれてアイスブレイクを行い、議論に入りました。論点は「コロナ禍において、オープンデータを利用することによるプライバシーへの影響にどう対処すべきか」、「新型コロナウイルス感染症拡大の中で、私たちがグローバル市民、そして若者世代としてできることは何か」の2つで、参加者が各国の状況を共有したり、新型コロナウイルスを食い止めるために個人情報を利用することに対する利点や懸念点を議論し合いました。若者としてできることとしては、SNSで情報を共有する際には情報の正確性に注意する、自分の周りから意識向上の働きかけを行う、政府にデータ利用について透明性を確保するよう提言する、など様々なレベルからの意見が出ました。

2. 文化交流では、ハイコンテキスト文化とローコンテキスト文化に着目し、はじめにコミュニケーションをとるにあたって文化によってどういった違いがあるかについて簡単なプレゼンテーションを行いました。そして3つのグループに分かれ、実際にコミュニケーションスタイルの違いを経験した場面について参加者同士で共有しました。参加者の中には、外国人の教授による英語の授業で、何も言わないことで否定したつもりが、逆に肯定だと捉えられてしまったという経験や、自分がそのときに使う言語によってはっきりものを言うか遠まわしに言うか無意識に切り替えているといった意見に多くの参加者が共感していました。留学経験者や多言語話者が多い国際学生会議の参加者ならではのグループワークができました。

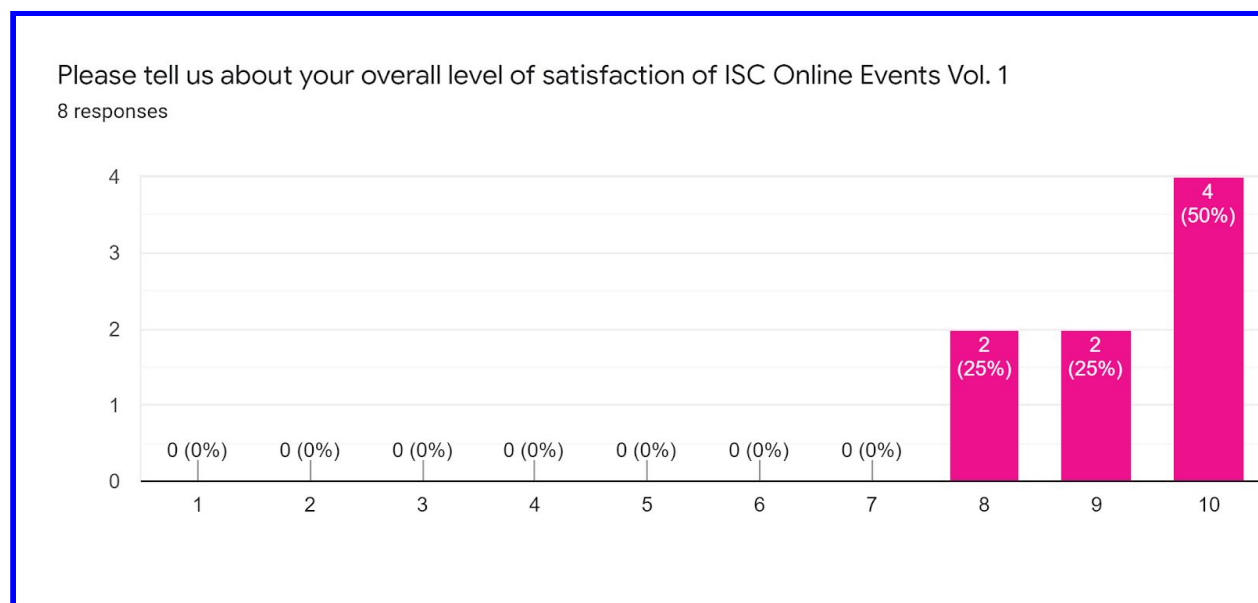
さらに、こうしたコミュニケーションの違いによる問題をどう防いでいくかということに関し、違いを否定するのではなくどの人と接するにあたって相手も尊重すること、アイコンタクトをとることなどの意見が出ました。ワークの最後には、グループをシャッフルして各グループでどんなことを話したか共有する時間を設け、自分のグループでは出なかった意見を知る機会となりました。

結果

イベント後に行ったアンケートでは、特に学術議論の満足度が高く、全体的な満足度も高い評価が得られました。また、「友達に勧めたいか」という質問に対してほとんどの人に高得点をつけていただきました。One-Day ISC66で時間が足りなかった反省を踏まえ、全体的なスケジュールに余裕を持たせ、一つのグループあたりの人数を減らしたことで、より活発な議論ができ、より濃い時間を過ごすことができました。参加者からは、「テーブルチーフによるプレゼンが理解しやすかった」「トピックが興味深かった」という感想をいただきました。

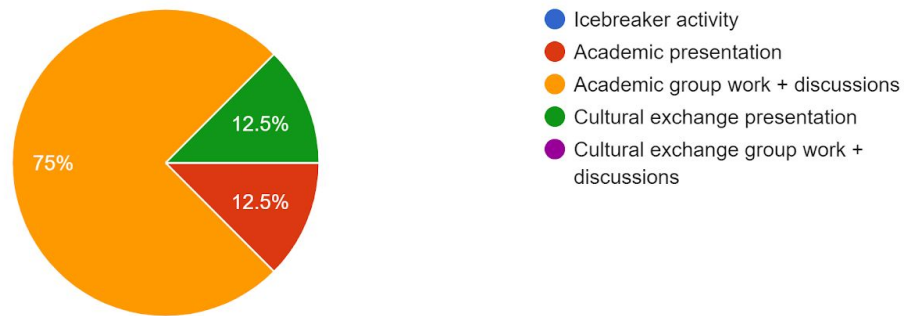
また、ISC Online Eventsの特徴である文化交流企画では、最後にグループをシャッフルした点が評価されました。参加者からは、「それぞれの個人の体験を共有し合ったところが面白かった」という声をいただきました。

今後への改善点としては、実行委員の数が参加者に対して多くなってしまったため、実行委員からは、オンラインでのイベントであることも鑑みて当日の運営参加人数を減らしてはどうかという意見が出ました。



What was the most memorable/beneficial part about ISC Online Events?

8 responses



実行委員からのコメント

今年新型コロナウイルスが世界中に拡大しているため、残念なことに本会議の開催を中止することになりました。それにもかかわらず、学术交流と文化交流というISCの特色を皆に知ってもらい、体験してもらうことを心がけ、オンラインイベントのシリーズを開始しました。本イベントの第一回目では、新型コロナウイルスのパンデミックの中、個人情報オープンデータとして取り扱うことのメリットとデメリットについて議論しました。日本、インドネシア、ベトナム、アメリカ、インド、タイの七カ国、それぞれの国によって個人情報の取り扱いや感染者の状況、国民の意識などが異なっているので、様々な話が出てきて、参加者全員が新しい知識を身に付けることができました。その後の文化交流では、異文化コミュニケーションについてそれぞれが留学中の経験などを共有し、異文化の環境でのコミュニケーションについても新しい知識を得ることができました。たった3時間だけでもこのようなトピックについて議論でき、視野を広げられて素晴らしかったと思います。(学術:ドー・ホアン・ヒエップ)

テーブルチーフからのコメント

The event brought me to educate myself in various subjects, understand many cultural differences, and help me to connect with many people all around the world. Accordingly, I felt inspired to grow and strengthen my views as a global citizen. I truly cherish all the memories that were made during the 3 hours that we spent together. (Ayu Puspita Ningrum)

(このイベントでは、様々な主題に対して自分自身の学びを深め、文化の違いを理解し、世界中の人々をつながることができました。これを通して、グローバル市民としての自分の視点をさらに成長させ、より強くしようという気持ちが湧きました。一緒に過ごした3時間の間に作ることができた全ての思い出を本当に大切に思います。)



ISC Online Events Vol.2

日時

2020年7月5日 15:00-18:00 (日本時間)

参加人数

日本在住学生 4名 (実行委員7名)
海外在住学生 2名 (実行委員1名)
計参加者6名 実行委員8名

参加国

5か国(アメリカ合衆国、インド、インドネシア、日本、フィリピン)

内容

1. 学術議論

Climate Activism through Mass Movements: Youth Fighting for the Future or Much Ado About Nothing?

(大衆の運動による気候行動主義:未来のために戦うのか、空虚な行動に終始するのか?)

2. 文化交流 Special Talents Playground

1. 学術議論では、まずテーブルトークによるプレゼンテーションを行い、グレッタ・トゥンベリさんの呼びかけにより始まった”Fridays For Future”を始めとする大衆運動を紹介し、大衆による運動、とりわけ近年盛んな若者による活動の概観について、そして気候変動における大衆運動の役割について紹介しました。

その後、「私たちは気候変動に対する大衆運動が、気候変動の問題を解決することにつながると主張する」を議題にディベートを行いました。賛成派、反対派に分かれて意見を出した後、それぞれの議事録を交換し合い、さらにディベートの準備を進める、という形式で各グループが意見をまとめ、最後に全体でディベートを行いました。賛成派からは、「大衆運動は一般市民、企業、そして政府の意識を高めることにつながり、過去にも効果をあげた例がある」「それにより消費者の意識を変えられれば、環境に配慮した商品を買うように消費行動を変えることにつながる」といった主張がなされました。一方反対派からは、「気候変動に対する大衆運動は漠然としているので実際の変化にはつながらない」「大衆運動は企業や政府に対する拘束力を持たない」といった主張がされました。

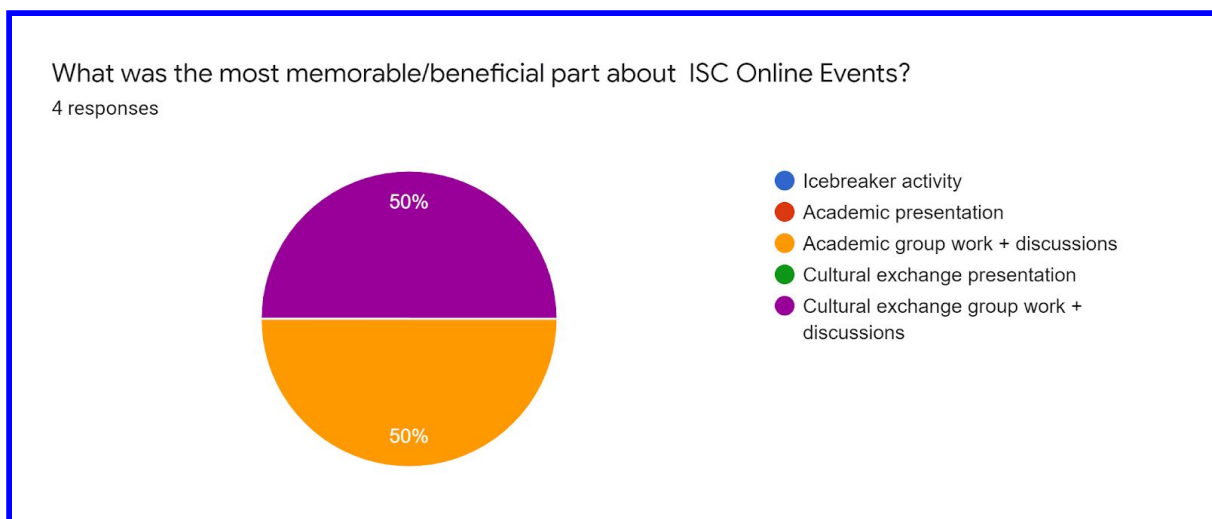
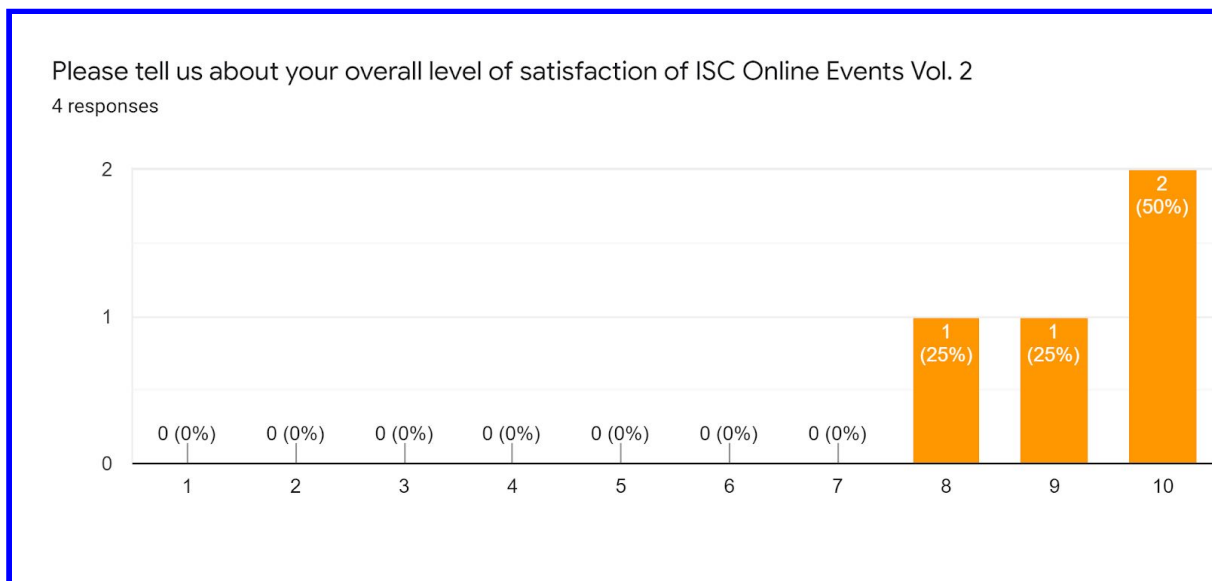
2. 文化交流では、参加者自身の特技や趣味を共有し合うグループワークを行いました。事前に動画で送ってもらったり、当日実際に披露してもらったりした後で、グループでの歓談を行いました。参加者は歌やダンス、好きな食べ物など個性あふれるものをシェアしていました。特技や趣味という国境がないものを通じた交流で、初対面同士にも関わらず、たくさんの会話が生まれました。

結果

イベント終了後に行ったアンケートでは、参加者が少なかったため回答数も少なかったものの、全体の満足度、友達に勧めたい度合いの両方について全ての参加者から8点以上の評価をいただきました。特に満足した内容としては学術議論と文化交流に回答が二分し、双方のコンテンツを楽しんでもらえたことがわかりました。参加者からは、「英語がうまく話せなかったが、参加者と話すのが楽しかった」「意見交換の場としても、国際交流の場としてもとても良かった」「とても楽しかった。直接会う形での開催ができれば参加したい」といった感想が寄せられました。

学術議論では人数を少なくしたディベート形式をとったため、全員が発言機会を得ることができました。また、文化交流については、自分の特技などを披露するのが恥ずかしかったという声が見られた一方で、多くの参加者が「自分の好きなことや得意なことを話し、他の人が興味を持ってくれて嬉しかった」と感想を述べていました。

また、今回は第1回目よりも実行委員の数を絞ったことで、より参加者とのコミュニケーションを密接にとることができました。



実行委員からのコメント

『大衆による気候変動運動』というテーマでディスカッションとディベートを行いました。気候変動は近年特に注目されている地球規模課題であり、同じ地球に住む人間として共に解決しなくてはならない、重要な課題です。ディベートを通して、様々な視点からこの問題を考えることができました。また文化交流では、参加者一人ひとりの特技や趣味を共有しました。『オンラインイベントであっても、お互いを深く知ることができた！』と参加者からも言っただき、嬉しかったです。(企画:澤村華乃)

I was able to think more about climate activism from both positive and negative perspectives. I also feel like I have made connections with new people through experiencing the event with participants from different parts of the world. (Public Relations: Mina Aoki)

(学術議論を通して、気候行動主義について、肯定的な面と否定的な面の両方から考えを深めることができました。また、様々な背景をもつ参加者とのイベントを通して新たなつながりをつくることができましたと思います。)

テーブルチーフからのコメント

I am so thankful that ISC gave me a platform to initiate a conversation on a topic that I am passionate about. Usually the debate on climate change gets too broad and people sometimes rely on impressions instead of careful thoughts. Hopefully through this event I have exposed the participants to some new perspectives. (Dao Doan Duy)

(今回、自分が強く関心を持っている分野について議論をする場を設けることができとても感謝しています。気候変動に関する議論では、深い考えよりも表面的な印象に頼ってしまい、漠然とした内容になってしまうことは少なくありません。この機会を通して、参加者が新たな側面に気づくことができているのであれば幸いです。)



ISC Online Events Vol.3

日時

2020年7月12日 15:00-18:00 (日本時間)

参加人数

日本在住学生 3名 (うち実行委員5名)
海外在住学生 3名 (うち実行委員2名)
計参加者6名 実行委員7名

参加国

6か国(アメリカ合衆国、インドネシア、チュニジア、ナイジェリア、日本、パキスタン、フィリピン)

内容

1. 学術議論
Circular Economy: Cleaner Environment, Healthier Humans
(サーキュラーエコノミー:よりクリーンな環境とより健康な人間)
2. 文化交流 Your Customs, My Customs, Our Customs

1. 学術議論では、最初にアイスブレイクを行った後、テーブルチーフによるプレゼンテーションを行いました。プレゼンテーションでは、環境問題や循環経済の概観、そして循環経済に対する賛否それぞれの意見を紹介しました。事前に参加者には、循環経済をアニメで説明した動画や雑誌の記事を共有していたため、プレゼンテーションによってトピックに対する理解をさらに深めることができました。

その後、2つのグループに分かれて議論を行いました。論点は「自分が住んでいる国の環境、廃棄物、環境汚染の状況」「循環経済への賛否」で、後半には循環経済を体現したいくつかの企業のケーススタディを紹介した後、そのケースに対する改善点や新たなビジネスアイデアについて議論しました。前半の議論では、国によって環境問題の状況が異なるだけでなく、政府や自治体の対応も様々であることが印象的でした。また、後半のビジネスアイデアでは、リサイクル可能なスマートフォンや、有機素材でできた洗剤の案がでました。それぞれのグループで学生らしい柔軟な発想をもとに活発に議論しました。そして、最後にはグループ間での共有を行いました。特にビジネスアイデアの部分については、二つのグループが全く違う内容を扱っていたため、よい刺激を得ることができました。

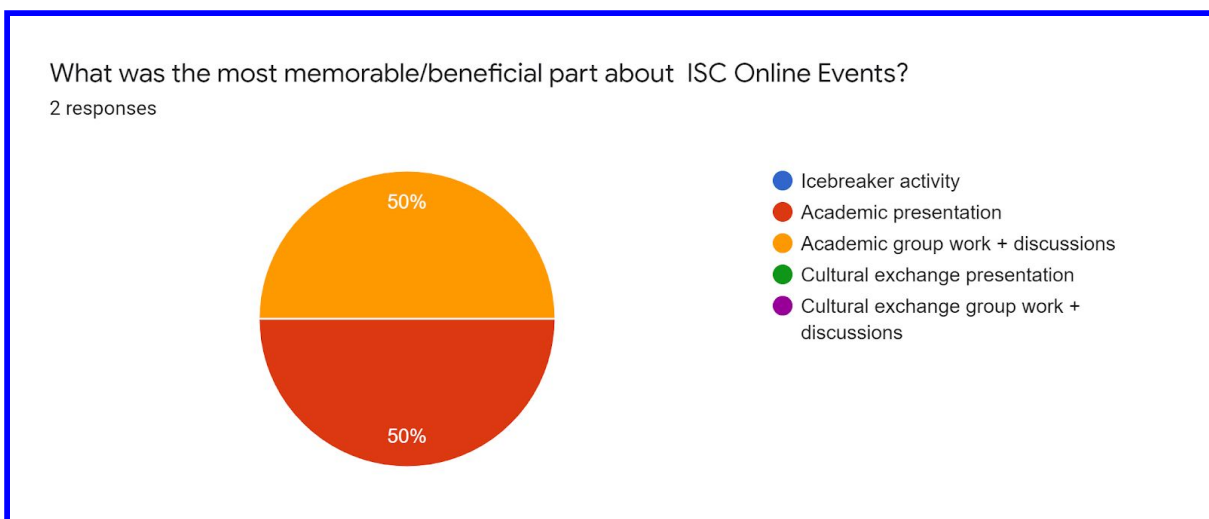
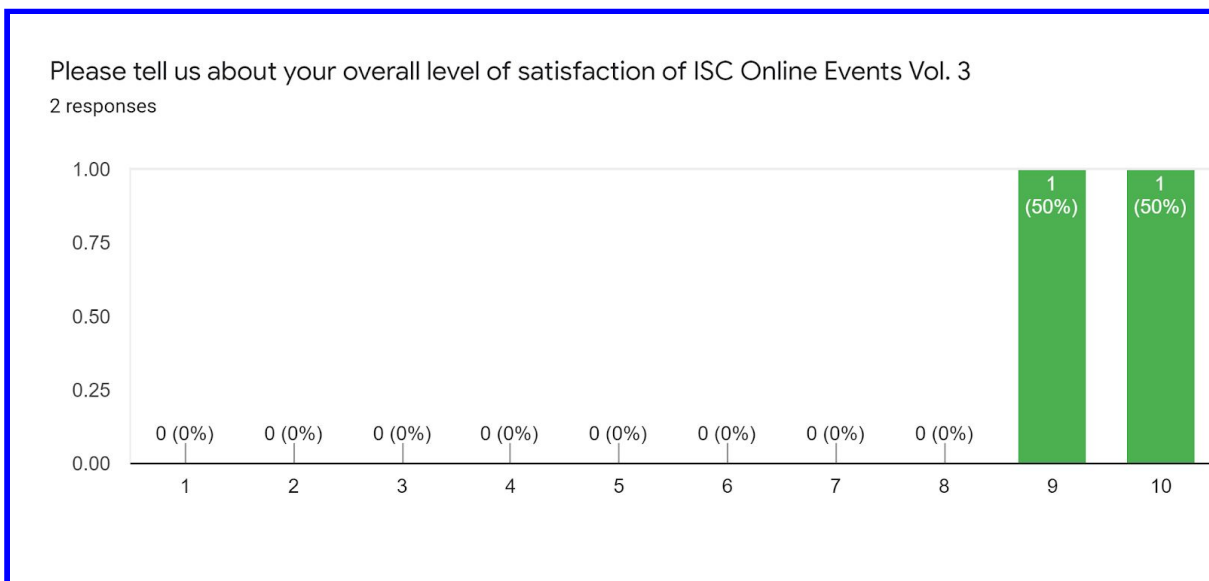
2. 文化交流では、学術議論とは別のグループを構成し、それぞれの食文化や年間行事について共有し合うグループワークを行いました。現代では簡単に違う国や文化の食べ物を楽しむことができますが、現地の人から直接話を聞くことで新たな発見を得ることができました。また、同じ休暇でも過ごし方に違いがあることが分かり、参加者からは「これまで当たり前だと思っていた慣習が、他にはない特徴的なものなのだと初めて知った」という声も寄せられました。

結果

今回は参加者の人数の関係でアンケートの回答数も少なかったものの、全体的な満足度が9点と10点という高い評価をいただきました。議論への参加度も高く、どの参加者も積極的に発言していました。参加者からは、「実行委員がこのイベントに対して熱心に取り組んでいたことが伝わった。事前の資料の準備や当日のファシリテーションが良かった」「ただ理論を学ぶだけでなく、伝えたり協力したりする力も学べるいい機会だった」「自分の関心に合致した内容だった。アイスブレイクのゲームが楽しかった」といった感想をいただきました。

また、文化交流についても、「学術議論の後にこうしたカジュアルに話せる話題があったのが楽しかった」という声があり、学生同士のつながりをつくるというISCの意義を改めて意識することができました。

また、今回は当日欠席が多く、直前にグループを変更するなどの対応が必要でした。せっかく応募してくれているにも関わらずこのような事態が発生してしまったことは惜しかったため、事前の連絡をより密に行う必要があるという改善点もみられました。



実行委員からのコメント

学術交流ではサーキュラーエコノミーについて参加者の地域での取り組みや現状を共有し合い、問題の深刻さに気付かされた。文化交流では食文化や祝日の過ごし方を中心に語り合い、互いの文化の共有点や違いが発見できたことが面白かった。(渉外:田村奈央)

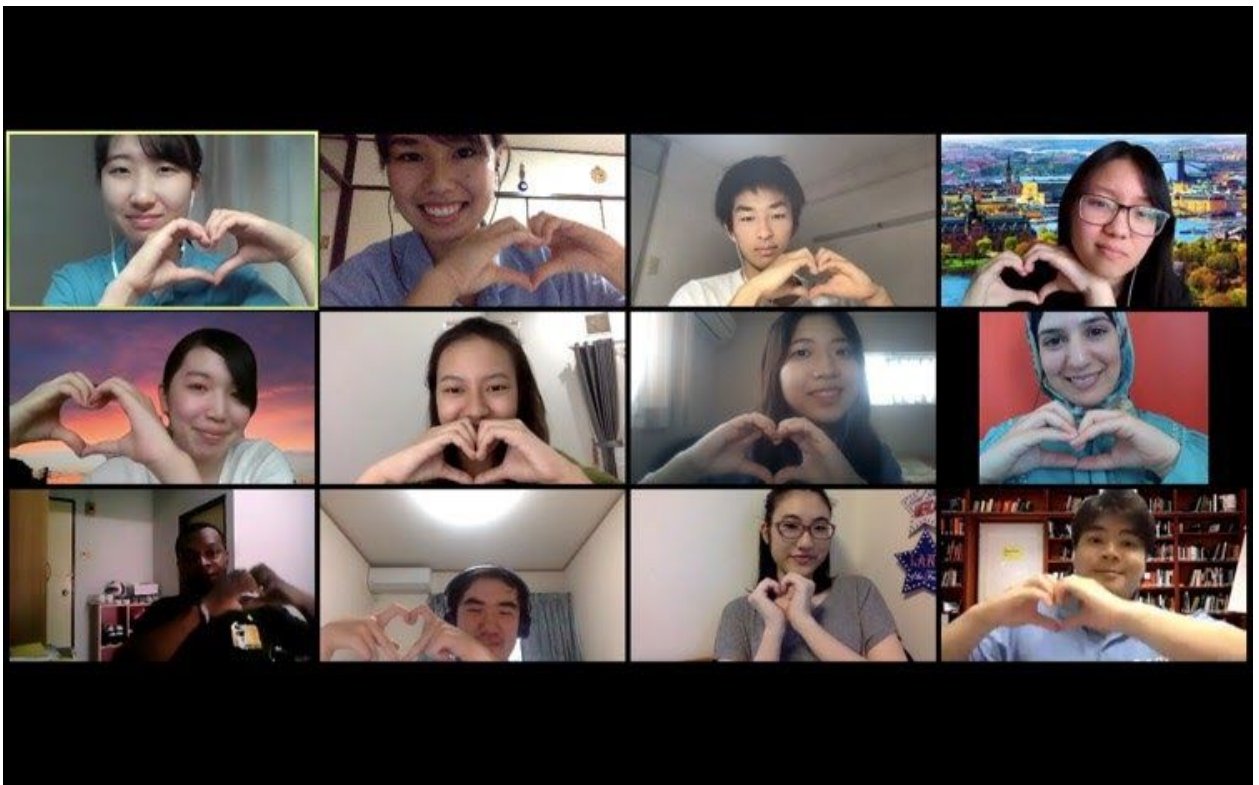
テーブルチーフからのコメント

It was fun, informative, culturally diverse and memorable.

Through this whole year with ISC66's great family, I have learned how to be effortless and natural while connecting with other candidates with totally different ideas. It became easier for me to establish ties that will certainly help me achieve my associative and professional goals. In addition, as a young Tunisian engineer who is enthusiastic about the environment, I have learned how to represent the aspirations and hopes of such communities, as well as address the most important issues that concern us through a systematic process, especially with the huge challenge of COVID-19. Most importantly, I was able to share my ideas with other participants through various topics. I had the chance to conduct interviews myself, to record visual and written marketing tools, and a lot more. I realized with all the differences, we are more similar than we think. We can solve all of the global challenges our countries face faster and more efficiently when we stand together. Thank you ISC66 and I hope I have achieved my challenging mission as a part of the family. (Narjes Mahjoub)

(今回は楽しく、有益で、文化的にも多様で、思い出に残るイベントとなりました。)

ISC66の素晴らしいメンバーと共にしたこの1年間、全く異なる考え方を持った応募者とながらる中でどうすれば苦勞せず、自然体でいられるかを学びました。このことは、今後つながり、専門的になっていく自分の目標を達成するにあたって人々との結びつきをつくりやすくしてくれたと思います。そして、環境問題に対して情熱を注ぐ若いチュニジア人エンジニアとして、情熱と希望をどのように表現し、特にこのコロナ禍の中で私たちに苦しめる重要な出来事をどのように対処していくかを学びました。さらに一番大事なことは、様々なトピックを参加者に共有する中で、自分自身がインタビューを受け、読み書きでのマーケティングスキルを高めることができました。私は、私たちは沢山の違いを持ちつつも、自分たちが思っているよりも共通している部分が多いことにも気づきました。私たちが一緒になれば、世界が直面している問題をより速く、より効率的に解決することができるはずです。ISC66に大変感謝しています。そして、その一員として自分の任務を全うできていたことを願います。)



ISC Online Events Vol.4

日時

2020年8月1日 15:00-18:00 (日本時間)

参加人数

日本在住学生 3名 (実行委員7名)
海外在住学生 5名 (実行委員1名)
計参加者8名 実行委員8名

参加国

4か国(アメリカ合衆国、インド、インドネシア、日本)

内容

1. 学術議論 Karoshi: Overworking in the Japanese Society
(日本社会における過労)
2. 文化交流 Your Customs, My Customs, Our Customs

1. 学術議論では、最初にグループに分かれアイスブレイクをした後、テーブルトークからのプレゼンテーションを行いました。ここでは、過労が及ぼす影響や、考えられる社会的要因、そして課題解決に取り組む政府や企業の例を紹介しました。事前にトピックについての大まかな内容をまとめた資料を配布していたため、その内容をさらに深掘りするプレゼンテーションとなりました。

その後、3つのグループに分かれ、「過労が蔓延する日本社会の状況にはどのアクターが重要な役割を占めているのか」「現在とられている対策は十分か。また、改善すべき点や全く別の方法はどのようなものか」を論点に議論を行いました。

一つ目の論点については、法律や枠組みをつくるのは政府である一方で、企業は利益をより重視するといった指摘や、労働者の意識や文化の重要性も無視できないといった意見があがりました。二つ目の論点については、若者が労働環境に配慮した会社を選ぶようにすることで少しずつ状況を変えられるのではないかと、といった議論がなされたり、経営層の多くは古い考えをもった年代であることが多いため、長期的な視点で労働者の意識向上を図る必要性があるとの指摘もありました。最後にグループごとに発表しあい、互いに新たな視点を得ることができました。

2. 文化交流では、前回と同じ慣習について共有し合うグループワークを行いました。学術議論とは別の3つのグループに分かれ、簡単なアイスブレイクを行った後で食べ物について紹介し合いました。前回とは異なり、今回は食文化についてのみ焦点をあてたため、画面共有をしながら写真を見せて一つ一つの話をじっくりとすることができました。

日本を訪れたことのある参加者からは、「日本の食べ物のことは割と知っていると思っていたが、知らないことが沢山あった。日本人参加者から話をきけて楽しかった」という声があり、オンラインであっても文化の新たな一面を知る機会を提供することができ

たことがわかりました。また、「自分の国の文化を紹介したときに、皆が興味を示してくれているのが嬉しかった」という声もあり、話すことも知ることも含めて楽しんでもらえたようでした。

結果

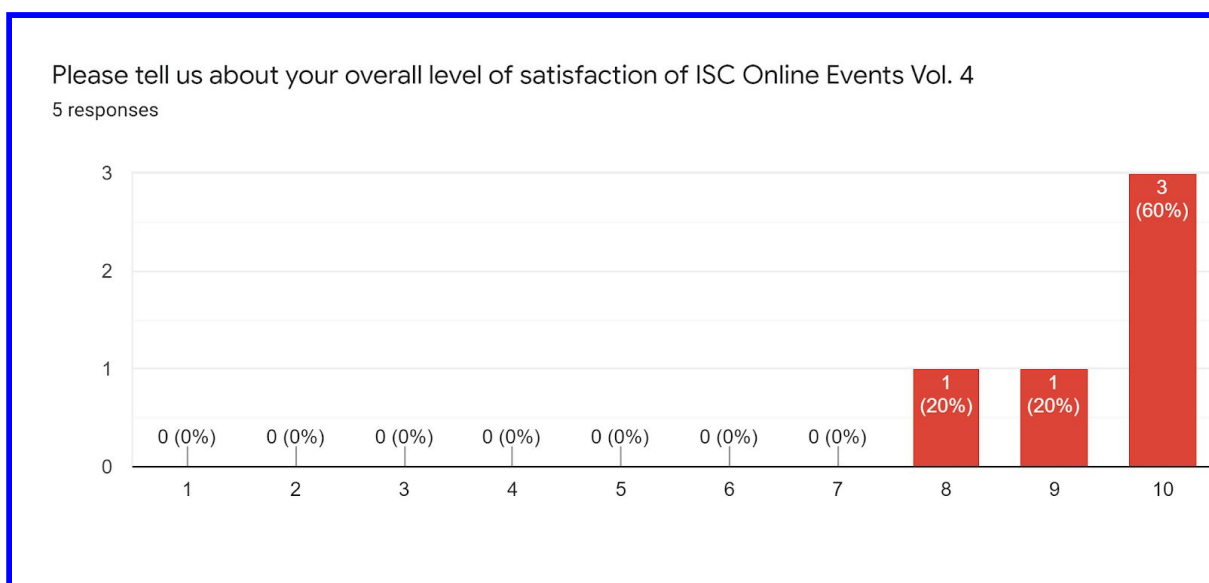
イベント後のアンケートでは、全体的な満足度、友達に勧めたい度合いの両方について全員から8点以上の評価をいただきました。また、今回はこれまでと違い、一番印象に残った部分で文化交流を選んだ回答者が多く、ISCとして重視している交流の部分も楽しんでもらえたようでした。

参加者からは、「オンラインだったけど楽しかったし勉強になった。間違いなく世界中の人とつながるいい機会だった。学術議論も文化交流も楽しかった」「ディスカッションで沢山発言できたし、文化交流で他の文化を知ることができたから楽しかった」といった声が寄せられました。

学術議論では、事前資料で概要を説明し、プレゼンテーションで詳しい説明が聞けた点が評価され、議論のよい導入になったとの声がありました。また、回答者の全員が「議論にしっかり参加できた」と評価し、活発な議論ができたことがわかりました。

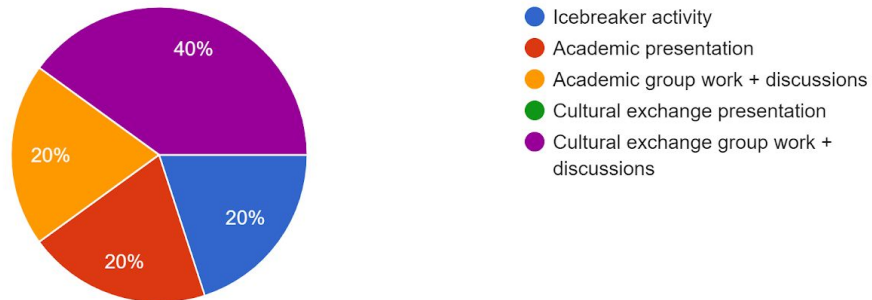
文化交流については、全ての回答者が9点以上の満足度を示し、学術議論とは違ったカジュアルな雰囲気でのワークが評価されました。また、「食という共通の話題をトピックにしたことで緊張が一気にほぐれた」という声もあり、参加者同士の交流を深めるという目的も達成することができました。

運営面では、接続トラブルがあった参加者が何人かいたものの、全体的にスムーズに運営ができました。また、前回までの課題であった参加者の当日欠席を防ぐため、事前のリマインドをより積極的に行ったことで、当日欠席が減り、当日に慌てることなく運営にあたることができました。



What was the most memorable/beneficial part about ISC Online Events?

5 responses



実行委員からのコメント

I really had a great time. We were able to deeply discuss the topic and I was able to get new insights about it. As for the cultural exchange, we compared Japanese and Indonesian traditional food and national holidays. It was great to see the difference between the two. (General Affairs: Kana Ozawa)
(とてもいい時間が過ごせました。トピックについて深く議論し合い、新しい知見を得ることができました。文化交流については、日本とインドネシアの伝統的な食べ物や年間行事について紹介し合いました。二つの文化の違いを発見することができてとても良かったです。)

テーブルチーフからのコメント

As a table chief and a returning member of ISC, I personally think that ISC is a wonderful event to attend. I would recommend this event to young people who wish to actively discuss issues that our world is facing. ISC gives me a platform to bring topics that I am concerned about and discuss them with different people with diverse backgrounds and ideas. Furthermore, this event unites me with people from all over the world and it inspires me to expand my horizons to be a better global citizen. Three hours might seem like a very long time, but it only feels like minutes if you truly enjoy yourself, and I really did. Hopefully through this event, I could raise more awareness about this issue and bring new insights to all of our participants. It is truly an experience that I want to cherish. (Yuri Kim)

(テーブルチーフとして、また元参加者として、ISCはとても素晴らしい機会だと思います。私は、世界が直面する問題を議論するのに強い興味がある全ての若者に、ISCを勧めたいです。ISCは、自分が懸念している課題をとりあげ、それについて多様な背景をもつ人々と議論できる場を提供します。さらに、このイベントは世界中の学生をつなげ、よりよりグローバル市民になるべく自分の視点を広げることにつながります。3時間というのは長く感じるかもしれませんが、本当に楽しんでいけばほんのわずかな時間にも感じますし、私もあつという間に感じました。このイベントを通して、参加者の意識が向上し、それぞれにとって新たな視点を提供できていれば幸いです。この経験をこれからも大事にしていきたいと思っています。)



ISC Online Events Vol.5

日時

2020年8月15日 15:00-18:00 (日本時間)

参加人数

日本在住学生 5名 (実行委員6名)
海外在住学生 7名 (実行委員1名)
計参加者12名 実行委員7名

参加国

10か国(インド、インドネシア、ガーナ、韓国、ケニア、タイ、パキスタン、フィリピン、ベトナム、日本)

内容

1. 学術議論 Surveillance Capitalism: Impacts on Commercial, Social and Political Futures
(監視資本主義:これからの社会にもたらすものとは)
2. 文化交流 Cultural Playground

1. 学術議論では、グループごとのアイスブレイクの後、テーブルチーフによるプレゼンテーションがありました。事前に共有していた資料の内容をさらに発展させ、巨大IT企業の事例を紹介しながら、「監視資本主義」についてかみ砕いて説明しました。

その後、3つのグループに分かれてディスカッションを行いました。前半では、「自分が今使っているSNSの規約を読んだことがあるか」「なぜ多くの人は規約に目を通さないのか」「人権を重視してプライバシーに関する規約をより厳しくするべきか」という観点から意見を出し合いました。後半では、「EUが導入した一般データ保護規則(GDPR)について、自分の国で知っていること」「SNSにおいてプライバシーの問題を解決する方法」を軸に議論を行いました。

多くのグループで「規約を読んだことがない」という意見が多くみられました。利用者と企業の間を考えた上で、自分の身を守る方法や新たなビジネスモデルについて活発な議論が交わされました。最後にはグループごとに発表を行いました。熱が入るあまり休憩時間にもテーブルチーフと議論をしている参加者の姿も見られました。

2. 文化交流では、第2回と同様の特技・趣味披露のグループワークを行いました。以前よりも動画を送ってもらおうよう積極的に働きかけた結果、多くの参加者が動画を送ってくれました。ダンスやスポーツ、歌など幅広いジャンルの話題が上り、和気あいあいとした雰囲気の中で参加者同士の交流を深めることができました。参加者からは「もっと話したかった」という声もあがりました。

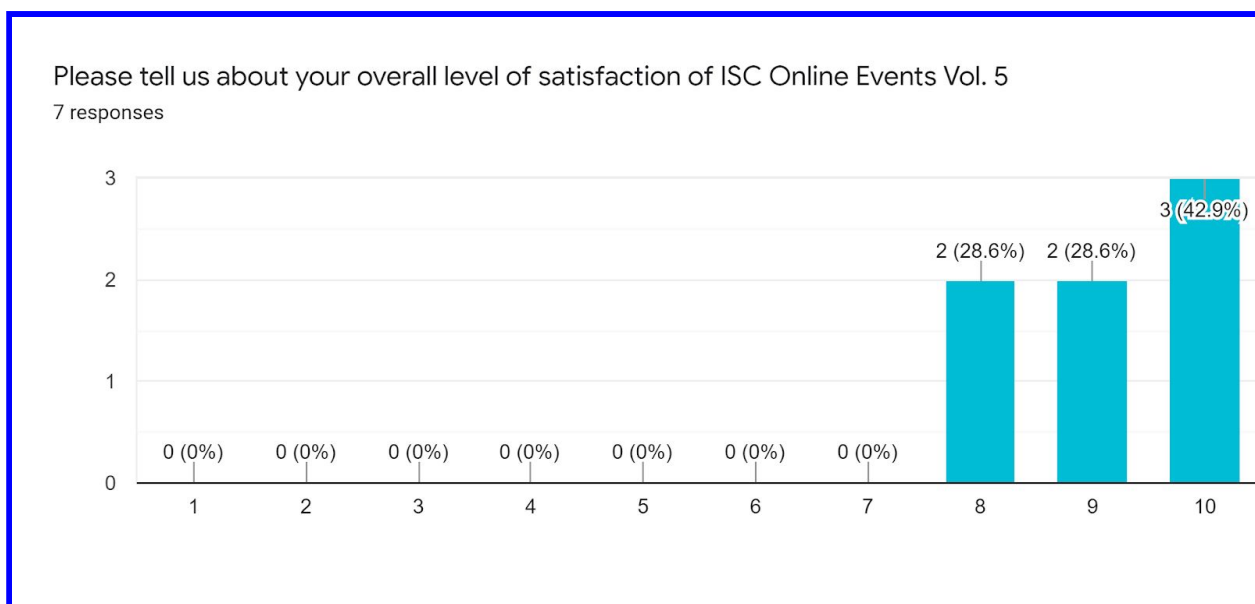
結果

イベント後のアンケートでは、全体的な満足度、友達に勧めたい度合いの両方について全員が8点以上と回答していました。特に良かった部分についても、学術議論と文化交流の両方ともが偏りなく評価されました。これまで何度も参加してくれた参加者からの「これまでの中で一番良かった」という声や、「大学生になってからこのような経験ができなかったのも、とても満足した」「今年参加したイベントの中で最もよいものの一つだった」といった声があり、今後の励みになるコメントを多数いただきました。

学術議論では、多くの参加者にとってなじみの薄いトピックであったため、プレゼンテーションによる説明が有効的だったようでした。また、ファシリテーターが積極的に発言を促したことで、多くの参加者が「議論にしっかり参加できた」と感じていました。

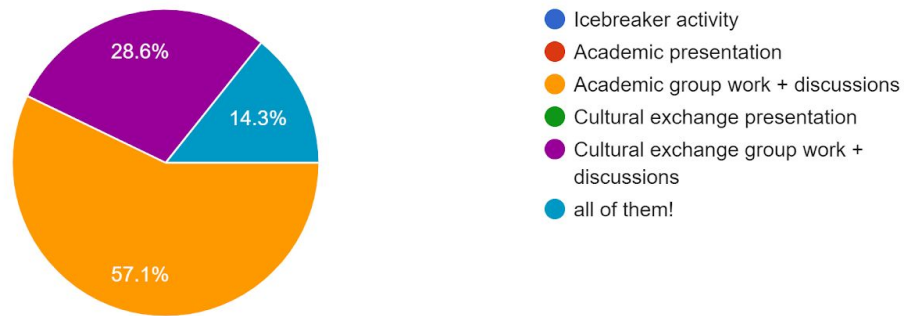
文化交流では、参加者から動画を共有するアイデアが評価され、「お互いのことを知ることができて良かった」「自分の知らなかった文化を知る良い機会だった」といった声がありました。

運営面では、イベント運営にも慣れ、スムーズに進めることができました。「実行委員に会えてよかった」という参加者からのコメントもあり、最後にふさわしい充実したイベントとなりました。沢山の参加者からの声を次年度以降のイベントに生かし、さらなる質の向上を目指していきます。



What was the most memorable/beneficial part about ISC Online Events?

7 responses



実行委員からのコメント

The presentation and discussion quality was very high, so it was very insightful for me! I also enjoyed learning more about other participants' backgrounds through the cultural exchange session. It was inspiring to learn about different ways of life of people of the same generation. (Public Relations: Mina Aoki)

(プレゼンテーションや議論の質がとて高く、とても見識が広がりました！また、文化交流を通じて他の参加者のバックグラウンドをより知ることができたのが楽しかったです。同じ世代の様々な生活を知ったのもおもしろかったです。)

I got to meet so many people from around the world and learn about the hobbies of the participants! (Academics: Kanlongtham Damrongsoontornchai)

(世界中の人たちと知り合えて、参加者の趣味を知ることができました！)

サブテーブルチーフからのコメント

I had an amazing time during this event. First and foremost, I was impressed by our table chief, Wasim, for coming up with an informative and easy-to-understand presentation. There was so much that I did not know about. It was especially shocking to learn that these tech companies can access so much of your information, including your phone's battery percentage. I was happy to see that our participants were readily taking in Wasim's presentation and building on with their own experiences during the discussions. When the discussion came to the end, I wished that we could have another opportunity to discuss more with these bright students from around the world. My desire to have another opportunity to meet these students became stronger throughout the cultural exchange activity, where we each got to know each other better through the videos that the participants created. The participants told us about their hobbies, their hopes for the future, and their passion for

learning. These conversations reinforced my love for connecting with peers from around the world. Even though we have faced unprecedented obstacles this year, talking with like-minded, forward-thinking peers inspired me to continue towards my goal to give back to the global community. I hope to meet the participants again in the future and work together on a project that would create a positive impact on society. (President: Namie Kawabata)

今回のイベントは素晴らしい時間になりました。まず第一に、テーブルチーフであるワシムのわかりやすく知識に富んだプレゼンテーションに感銘を受けました。私自身初めて知ることも多く、特にIT企業がスマホのバッテリー残量のような細かい情報まで把握していることに衝撃を受けました。そして、参加者がこのプレゼンテーションの内容をしっかりと受け取って、自分の経験を織り交ぜながら議論に参加しているのを見て嬉しく思いました。学術議論の時間はあっという間に感じ、世界中から集まったハイレベルな学生たちと議論した時間を名残惜しく感じました。また、この思いは文化交流企画を通じてさらに強まりました。互いの趣味や将来の夢、学びに対する情熱などを共有し合う中で、世界中の学生とつながることへの喜びを改めて感じました。今年は予期せぬ事態に見舞われましたが、心の通じ合う、前向きな仲間たちと出会えたことで、グローバル社会に貢献したいという自分の目標への思いがますます強くなりました。いつか参加者と再会して、社会にいい影響を与えるような働きかけを一緒に取り組めることを願っています。



終章

謝辞

謝辞

助成

国際教育振興会賛助会
独立行政法人 国際交流基金

協賛

一般社団法人 Japan Innovation Network

後援

一般社団法人 国際教育振興会
国連開発計画(UNDP)駐日代表事務所
特定非営利活動法人 経済人コー円卓会議日本委員会
日本国際連合協会東京都本部
キラーロボット反対キャンペーン

学術協力をいただいた皆様

Human Rights Watch/Campaign to Stop Killer Robots 左元様
Campaign to Stop Killer Robots Dalma Biro 様
Campaign to Stop Killer Robots Katona Illés László 様

Dr. Sulikah Asmorowati
Department of Public Administration, Faculty of Social and Political Sciences,
Universitas Airlangga.

広報協力をいただいた皆様

一般社団法人アフリカ協会様

以上の方々を始め、多くの方にご協力いただきました。
この場をお借りして御礼申し上げます。
皆様、誠にありがとうございました。

第66回国際学生会議 事業報告書

発行責任者:河畑波恵

編集責任者:尾野ひかり

発行:日本国際学生協会 第66回国際学生会議実行委員会

〒662-0891 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155

関西学院大学文化総部 I.S.A



International Student Conference